

Views from Orienteering

村越 真

ナビゲーション技術の伝道師としてオリエンテーリング競技だけでなく社会に貢献する。

view12:「異業種」交流

日本のアウトドアは種目間の垣根が高く、それぞれ独自の文化を作っている。歩けば登山だが、走ればトレラン。もちろんスピードが危険性に違いを生み出すが、登山者は新参者のトレランを「環境破壊」だの「危ない」だのと批判する。山の危険は登山者にとってもトレランにとっても等しく存在する。軽装のトレランは確かに危険を内在しているが、登山者よりも行動スピードが速いので、一概にトレランが危険度が高いとも言い難い。環境破壊については、重い荷物と登山靴で歩く登山の方がひょっとするとより破壊の程度は大きいかもしれない。

同じことはオリエンテーリングについても言える。オリエンテーリングは、その発祥が野外をナビゲーションする技術を高めるトレーニングである。日本でも初期のオリエンテーリングには、登山界から多くの人が関わり、発展に寄与してきた。現在のオリエンテーリング界の基礎はこうした人が築いたといっても過言ではない。競技が先鋭化するに従って、独自の部分が出てくるのは当然だが、常に周辺領域との接点を意識しないとガラパゴス化する。常に遺伝子交配をしないと、種としても脆弱になる。そんな問題意識が根底にあって、1月には3つの「異業種交流」イベントに取り組んだ。

第一弾は、「森を走ろう 2012:トレランの現状と将来を考える」。1月7日に開催されたこのイベントは、一昨年の12月に開催されたシンポジウムの第二弾である。トレランの源流は様々だが、その中の一つに1980年代に下嶋溪さんが提唱したランニング登山がある。徹底的な軽量化と高い身体能力によって、旧来なら2-3日の行程を1日程度で走りきってしまうそのスタイルは、当時のアウトドアアスリートには多大な影響を与え、僕もトップのオリエンティアとともに彼の足跡をたどり、山を走った。1990年代に始まった日本山岳耐久レースの初代チャンピオンは多摩オ

リエンテーリングクラブに所属していた田中正人氏だし、現在でも柳下大、山口大助などのトップのオリエンティアがトレランで活躍している。

参加人口こそ激増しているトレランだが、全国組織はなく、参加者が集うクラブも数少なく、イベント主導型という点ではまだまだ発展途上だ。オリエンテーリング界が1970年代に経験した地元や自然保護との軋轢など、共通する課題も持つ。そんな問題を関係者が共有しようと主催したのが今回のシンポジウムだ。共催にランニング学会（これはJOA会長の山西さんの提唱でスタートした20余年の歴史を持つ学会である）、後援に日本山岳協会が連なるなど、その位置づけにふさわしい団体に関連しての開催となった。参加者も登山者、トレイルランナー、そしてオリエンティアなど多彩な顔ぶれとなった。



森を走ろう 2012 は約 80 名の参加者を集めて立正大学で開催された。オリエンテーリング界からも山口大助、柳下大などトップ選手が演者として参加した。中央背中は山西 JOA 会長

二つ目のイベントは1月21日に行った指導者向け読図講習だ。これまでも一般向けの講習会は極力開き、大学の公開講座から登山団体の依頼、私企業による講座まで幅広く実施してきた。それによって日本のアウトドア界の読図・ナビゲーションに一石を投じてきた。しかし、自分ですることには限りがある。教えれば教えるほど指導者側にも課題が多いことに気づく。登山界の人も含めて指導にあたる多くの人とそうした問題意識を共有し、意見交換したいと考え企画したのがこの研修だ。

登山界からは、登山のワールドカップと言ってもよい「ピオレドール」（黄

金のピッケル:その年の最も印象的な登攀に与えられるフランスの賞)受賞者の天野さんと佐藤さん、山の安全に関する著述も多い柏さん、アドベンチャーランナーの樺沢さん等、そしてもちろんナビゲーションスキルの普及に関心を持つオリエンティアも集まった。あいにくの冷たい雨となったが、さすがにびくともしないメンバーによる実習や意見交換は楽しかった。



読図指導者講習会の一コマ。手前左右はピオレドール受賞の天野さんと佐藤さん。中央奥は松澤選手



指導者講習会で試してみた整置練習方法。鳥の足のように3方向に伸びたくいの中から地図と方向のあったものを選ぶ。野山でもこのように道の方角確認をすることがあるので、実践的な方法だ。

第三弾は、1月28-29日に開催した有度山トレイル三昧で、トレイルランニングとロゲイニングの二日間イベントだ。当初は参加者層が全くといっていいほど異なっていた二つのイベントだが、今回はトレイルランナーの20%がロゲイニングに参加してくれるまでになった。彼らがオリエンテーリングまで進むか、と言われると答えに窮するが、少なくとも彼らはナビゲーションを楽しむ仲間であると同時に、なによりナビゲーションスキルの意義と価値が分かる希有な存在なのだ。

異業種交流は、直接的に増やすオリ

エンティアの数は多くないかもしれない。しかし、オリエンテーリングの社会的知名度とステータスの向上には大きく役立つだろう。マーケティングの世界ではこうした間接的な販売戦略をブランディング(ブランドの確立)と呼ぶらしい。今後もマーケティングを支えるブランディングを続けていくことは、オリエンテーリングにとってのみならず、アウトドア界全体の発展にも寄与するだろう。

view13:ファシリテーター

イギリスでナビゲーションの講習を受けて以来、講習では積極的に「問い」を活用している。もともと現代教育の世界では、生徒の思考を焦点化させることで、彼ら自身での解の発見へと導く「発問」は常識的な手法である。問いを活用したら、読図の講習はもっとおもしろくなるのではないだろうか？

もう一つ教育的な手法で気になっていたのは、二人組の活用だ。数年前フィンランドの学校を訪れた時(フィンランドは国際学力調査 PISA の 2003 年調査で上位を占め、日本の教育関係者の「フィンランド詣で」が相次いだ)、小学校中学年のアート(図工だろう)のクラスで二人組でのモザイクの作成が行われていた。二人で行えば、自分以外のスキルを学ぶ機会になる。協同で行うことで、自分のデザイン意図を意識し、明確に言語化する必要も生まれるだろう。教師が一方的に教えるよりもはるかに教育効果が高いのではないだろうか。

そんな二つの手法を、最近の講習会で試してみた。2月に行われた講習会では、もともと講師1名で20名を見るという無謀な設計だったので、なんらかの手を打つ必要があった。安全管理面にも問題がある。トレラン部という普段からある程度顔見知りの集団が対象だったので、随所で二人組課題を設定した。目標地点を決める。そこまで二人で地図を見ながら走っていただく。走る前に、何を確認してそこまでナビゲートするのかを二人で確認し、また走りながら二人で相互に確認してください。こんな簡単な指示でも、コミュニケーションは格段に高まる。

組み合わせは随時変えるので、毎回ではないにしても自分よりスキルの高い人と組むことがあれば、その人の語ることを直接聞き、現地でもそれを確認するチャンスが得られる。スキルが

最上位に位置する人にとっても、相手が自分より地図読み能力がないことはすぐ分かるから、分かるように伝えようとする丁寧な言語化が期待できる。

直接感想を聞きそびれたが、終了後の参加者のペアでの会話を見ていると、参加者には十分な満足を提供し、屋外での地図読みの習得手法として十分機能するように感じた。考えてみれば、オリエンテーリングでも「スピーキング0」という手法があったっけ。



二人組だと話が弾む。どのペアも講師が驚くほど会話が弾み、地図の読み取りや確認への意識が高まった

もう一回の試みは、仙台でのインストラクター講習会だ。これは東北大と宮城女学院の大学生が数多く参加したので、「新入生勧誘を想定して、オリエンテーリングの魅力を3分以内で語るシナリオを作ってみよう」「想定されたコースでの指導計画を作成してみよう」といったテーマで2-3人のグループでの協同作業を行ってもらった。その後は模擬発表をしてもらい、それについてのコメントも参加者どうしで出してもらおう。彼らのコメントの多くは的確だから、講師はコメントを整理し、中でも重要な部分に焦点を当てることや、全体をまとめるファシリテーターが主な役割となる。

模擬発表とそれへのコメントを含めたこの形式も、参加者には新鮮かつ深い気づきをもたらしたようで、最後の振り返りでも、初心者に教える際の様々な課題に対する気づきが挙げられた。その気づきこそが、彼らがさらにスキルアップする上でのリソースになることだろう。



オリエンテーリングの魅力のグループワークの発表結果。講師の役割は出てきた考え方を整理し、方向づけることにある。



2-3人グループによるグループワークと発表は参加意識を高めるとともに、その発表に他の参加者がコメントするという形で、気づきの深まりを提供してくれる



3人グループで指導法をロールプレイングしながら練習する受講者。自分たちで実際に動いてみると、当たり前のようにやっていた指導法にも様々な問題があることが分かる。

(村越 真)